

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成20年3月号

平成二十三年三月一日発行 第十八巻第三号  
平成二十三年九月十八日第三種郵便物認可

通巻第二〇一号 毎月一回 日発行



# 白山

高橋将夫

人の世に長居をしたる冬蚊かな  
襖開き影が入つてきたりけり  
結氷の湖にひしめく命かな  
鮒にここにことことはのわたつうみ

存分に手足を伸ばす冬木かな  
枯れ茨痛いところをつかれたる  
ほどほどのところで消えし冬の虹  
年の火に恋の炎も混じりをる  
浮き寝する場所にこだはる浮寝鳥  
初雪の消えぬ間にくる次の雪  
白山の時雨つくせし明るさよ

# 大 晦 日

松 本 桂 子

朝の湖さくらもみぢの吹きこめり  
日表にあれば睦まじ鴨かもよ  
まんさくの紅葉してをる風の道  
大日さま灸花の実供えましよ  
靴下の指五つあり竹の春  
万両の朱にすこしの刻のあり  
つはぶきの花のをはりの頃の雨  
ふわつと風初冬の音のとほりけり  
さくらもみぢ小さき餅を口に入れ  
波音の柳行李や冬芝居

## 特別作品

アロエの花土手をくだりてほむら立つ  
玻璃戸越しカニシヤボテンと言ふ明かり  
寄棟に泥の溜りし返り花  
山茶花の白みて墓に参りけり  
洋服リフオームします葉牡丹売る  
かの巫女のアイロン掛けするクリスマス  
水道資料館来て煤払ひ  
年木切るとて婆さまの草刈鎌  
ゆく年の少し明るい空のいろ  
大みそか男のやうな墨の跡

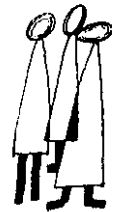
# 槐安集

水野恒彦

冬の野に井上靖とすれ違ふ  
桃の木に陽のゆきわたる降誕祭  
桜梢がたと崩るる夜さりかな  
温石を抱きて臍のありどころ  
雪の日暮はちちが過ぎははが過ぐ

延広禎一

狐火や Pasta に芯のありにける  
俎板に御意のままよと赤海鼠  
牛の影鳩の飛ぶ影近江かな  
竹人形の肌斑入りや冬茜  
狐火の出るの出ないの賽を振る



加藤みき

軒あり寝言ある凍土の中  
寒しじみ酒は楽しく飲むべかり  
風と日、ゆらりゆらりと冬の竹  
月光の霜柱なり羽音あり  
寒晴やたどりつきたる二〇〇号

石脇みはる

たちまちに奥山の池鴨あふれ  
寒鼻一角犀の動きあり  
寒干の魚にありし目玉かな  
餅搗に閑はりなくて年守る  
初鯨のおばけぶるぶる酢味噌かな

中島陽華

冬三日月金のしづくをこぼしたる  
先生に子がまた出来て牡丹焚く  
両口屋是清食して師走なり  
龍の玉飛んで洞窟の方ほうげしやく解石  
クリスマス尉とんばあと恋の夜

竹内悦子

銀杏散る風にはじまる舞踏会  
蛇口より神の水汲む師走かな  
伊勢海老の髭の動くを計らるる  
甕の泥洗つてゐたる聖夜かな  
錦木の葉のくれなゐは血のほひ

栗栖恵通子

義妹逝く  
通夜終へし太平洋と冬花火  
まだ熱き骨挟みあふ冬の虹  
經典に残れる虫となりしかな  
鮫鱈をしやぶり尽くせる笑ひかな  
砂曼茶羅砂に戻れり除夜の鐘

大島翠木

冬はんざきたましひ動くことに倦み  
冬北斗水に劍山沈めけり  
雪虫は冬の桜に狂ひけむ  
一陽来復今朝竹林の照り始む  
鏡餅の前で四角い封書切る

雨村敏子

槐安国に南天の実のたわわ  
くれなゐを極めて冬の蛇莓  
恋歌はソプラノなりし嫁が君  
泰山鳴動極月の海牛  
人間に閑はつてをる海鼠かな

小形さとる

突堤に男ら溜まる冬日和  
冬蠅やまた方舟を作るべし  
魂あらばこそ赤蕪も青痣も  
凍蝶のはらわたまでの色好み  
木菟鳴くや腹かつ切つて男らは

本多俊子

着ぶくれて遙かなる日を眩しめり  
ビュフエ展出て冬天を舞ふ思ひ  
三つの尻ふるふるゆらす巫女秋沙  
木の洞に和毛にこげのあそぶ年わすれ  
赤海鼠真水流してをりにけり

天野きく江

宙に舞ふ郷愁といふ枯葉かな  
捨てられぬ癖持ち歩く雪女  
耽々と山へ入りたる寒鴉  
大笑ひしてゐると思ふ鼠河豚  
古代魚は戦争知らず去年今年



# 槐市集

近藤紀子

初冬のレリーフにある大叙事詩  
回廊行く菩提樹落葉しきりなり  
冬満月栄華の跡をただ照らす  
極月の右往左往す海馬かな  
ひたひたと何かつきくる十二月

近藤喜子

奥底の轟々と燃ゆ冬の山  
天竺の明るさを曳く鯨なり  
青空より針きらきらと時雨かな  
羽衣を奪はれたるよ檻の鶴  
冬晴や激流をなす歓喜の曲

鈴木勢津子

何処より軋む音して風花す  
冬の日の壁に相寄る影法師  
若女将ジーンパンはいて落葉焚く  
人それぞれ急ぐことなく年用意  
涯には瑠璃の空映え竜の玉

瀬川公馨

去年今年大役担ふ昆布の耳  
小春日や仰山でたぞ貝の殻  
枯葉形どり半人間半獣凶  
荒くれの身体ながらの獅子柚子よ  
寒鯽のカマをせせくる男かな



# 槐集

## 高橋将夫選

桐一葉黄泉に落ちゆく音ならむ 宗像 南 一雄

冬銀河大魚の影のよぎりたる

深海の魚の灯明お霜月

平仮名に似たる晩年とろろ汁

檸檬黄に一途の黙は柔軟心

山々眠り本流の速さかな 枚方 近藤きくえ

冬うららテトラポッドに赤き鏝

まだぬくみ残れるコート渡さるる

梟の鳴く夜や心やすらげる

大津絵の鬼の提灯かじけ猫

冬の野や身の内の火を育てをる 安城 近藤 公子

鬼火かな根方に灰のなかりける

六つの花こころの襲に降り込めり

頭の中に寒九の水を張りにけり

死ぬるとは寝むりつづけて冬牡丹

雲動き人の動きて冬ぬくし 枚方 中野 京子

名を知らぬ真赤な落葉鬼の面

裸木や散華のあとのしじまなる

憤怒像菩薩像あり枇杷の花

星々の除夜の鐘の音鳴つてをり

鎌足の八方にらみ納め札 谷村 幸子

枇杷咲いて今日の落日大きかり

極月の真竹とりわけ艶めきて

居心地のよき円卓のぬくめ鮓

神鈴の紐新しや年用意

冬障子開ければ宙に未知のあり 岡崎 岩月優美子

翌檜を登る途中の枯蠅螂

渦なして落葉舞ひ行く第九かな

冬日向観葉植物とわたし

狐火や闇にたかぶる視神経

# 銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

平仮名に似たる晩年とろろ汁 南 一雄  
まるで平仮名のようにかろやかで平穩な晩年。すべからく晩年はかくありたいものだ。俳句もまたしかり。ところで、作者は癌を克服された後、今度は別の病の痛みに難渋しておられる。そんな日常にあっても、気持だけは明るくと願つての一句である。

檸檬黄に一途の黙は柔軟心 一雄  
じつと耐えておられる様子が伺える一句。しかし、腹に納めかねるときだつてあろう。

桐一葉黄泉に落ちゆく音ならむ 〃  
深海の魚の灯明お霜月 〃  
冬銀河大魚の影のよぎりたる 〃

提灯鮫鱈の提灯は灯明だぞうだ。「お霜月」に救われる思いがした。「冬銀河」は大景。以上、全て精神の風景。

まだぬくみ残れるコート渡さるる 近藤きくえ  
コートを手渡されて、ふと人肌のぬくもりが残っているのに気づいた。意味深長な一句。木下藤吉郎を思い出してしまった。掲句はどんなシチュエーションでコートが渡されたかには一切ふれず、コートに残るぬくみだけを切り取っている。誰にとか、どこでなどと作者に確認するのは野暮というもの。それを聞かないと安心して句を解釈できないという人もいる。しかし、それでは俳句鑑賞の楽しみを放棄するに等しい。俳句はレポートの解説ではなからう。

鬼火かな根方に灰のなかりける 近藤 公子  
焚火のようなものが見えた。近づいてみると、どうも焚火ではなかったようだ。燃え残りや灰がないところからすると、鬼火だったのでないかという。灰がないから鬼火と推理するところがいかにも作者らしい。

憤怒像 菩薩像あり枇杷の花 中野 京子  
憤怒像と菩薩像をならべてはみたが、根本は仏の慈愛。つつましい枇杷の花の方がこわい存在かもしれない。

翌松を登る途中の枯蟻螂 岩月優美子  
翌松はヒノキ科の高木。材質はヒノキより劣る。名前の由来は「明日はヒノキになろう」からきているという。枯蟻螂の場所がアスナロの幹の途中であるところがなんともシニカル。「明日は竜になる」つもりであったのだろうか。

梟のこゑ 億年の星あかり 近藤 喜子  
今ここで見ている光は幾億年も前の星から届いた光。仰ぎ見ているのは幾億年も前の星の姿。梟の声が永劫の世界に吸い込まれてゆく。

日記買ふ向かふ五年は桜色 富松 寛子  
日記といえは三日坊主の代名詞。年の初めの意気込みはどこへやら、何時の間にか忘れられてしまふというのが相場なのに、向こう5年間という長いスタンスを持ち出しているところがなんとも愉快。ページも桜色、将来も桜色といったところ。(以下略)